

2024 年度

第 11 回ブックショートアワード

# よい子の皆さん、動物園へようこそ

かぐやま  
香久山 ゆみ

■ 作品タイトル・・・よい子の皆さん、動物園へようこそ

■ 元にした作品のタイトル・・・「白雪姫」

■ 著者名・・・香久山 ゆみ（かぐやま ゆみ）

■ あらすじ(140 字)

数十年ぶりに訪れた動物園は、リニューアルですっかり様変わりしており、かつての思い出も蘇らない。しかし、白雪姫が幼い日の記憶を呼び覚ましてくれた。消えた七人目の小人。あの日、幼い私は消えた小人の代わりに務めるべく、白雪姫の庭に一步踏み出した。

■ 文字数・・・2,814 字

よい子の皆さん、動物園へようこそ

ターミナル駅直結の、都会のビル群の真ん中にある「天王寺動物園」は、日本で三番目に古い動物園だ。

もう何十年ぶりだろう。幼い娘の手を引いて入園ゲートをくぐると、園内はすっかりきれいにリニューアルされている。昔はもっと畜舎も檻も扉もコンクリート造りで、全体的に灰色のイメージだった気がする。今は環境型展示が流行と言うこともあってか、畜舎は新しくなり、園内に緑も多い。ずいぶんと思い出の中の天王寺動物園とは様相が変わっているから、幼い記憶が呼び覚まされるようなこともない。

それに。

「ちょっと！ 走ったらあかんで。ちゃんとママと手をつないで！」

ぎゅっと娘の小さな手を握る。初めての動物園に興奮した娘は、少しでも目を離そうものなら駆け出していこうとするので、おちおち感慨に耽ってもいられない。

娘のペースに合わせて園内を歩く。

ゾウがいない。トラもいない。ニホンザル舎もなくなってしまった。動物園の目玉だったコアラさえ一匹もいない。かつてコンクリートの柵の向こう側にいたキリンやライオンは、今は「サバンナゾーン」で優雅に自由を謳歌している。

せっかく帰ってきたけれど、思い出のよすがなどもう残っていないのかもしれない。猛禽舎など往時と変わらない場所もあったけれど、幼い私は関心を持たなかったのであろう、特にそこから呼び起こされる記憶もなかった。

「なー、ママ。お腹へったあ」

「そしたら、お昼ごはん食べにいこか」

地図を頼りにレストハウスへ移動する。そこで、懐かしい顔に会った。

十二時ちょうど。

レストハウス前の小さな家から、彼女が出てきた。軽快な音楽とともに。そのメロディも彼女の挨拶も当時とまるで変わらない。

「白雪姫時計台」は、四十年近く前に初めて私が天王寺動物園に来た時からあった。

十五分おきに楽しいメロディが流れて、小さな家から白雪姫が姿を現す。そして、彼女を囲む七人の小人や庭の小鳥やリスたちと一緒に踊り出す。

何が幼い私の琴線に触れたのか、私は初めて見た時から白雪姫時計が大好きで、せっかく動物園に連れてきてもらったというのに、十五分おきに親の手を引いては白雪姫時計の前に陣取ってうっとり彼女を眺めた。そうだ、だから動物の記憶がろくにないのだ。

よい子の皆さん、動物園へようこそ

いつも家でおとぎ話を読んでもらう時には、自分がお姫様だったらと憧れるくせに、なぜかこの時計台の白雪姫になりたいとは思わなかった。その代わり、自分も小人の一人になって白雪姫の隣で一緒に踊ることを夢想した。白い肌の愛らしい白雪姫とお友達になりたかった。それでふらふらと時計台の柵を乗り越えようとするたびに、父や母に手を引かれて止められたものだ。

私は敬愛する白雪姫に会うために、何度も動物園に行きたいとせがんだ。交通の便がよく、家から三十分足らずで来られるということもあり、両親は頻繁に私の願いを叶えてくれた。

「あれっ、一人足りへん」

ある日、いつものように時計台の前に張り付いていた私は言った。何度数えてみても、小人が六人しかいない。

「なあ、小人ひとりおらんようになってるで。どうしよ」

母に言っても「そうかあ」と言うだけで取り合ってくれない。

ようやく十まで数えられるようになったばかりの私は何度も何度も数え直したけれど、やっぱり六人しかいない。これは白雪姫の一大事だと、私は七人目の小人としてダンスを全うするべく、柵に足を掛けようとしたところ、やはり母に止められる。

仕方がないので、閉園時間までずっと時計台の前で待ったけれど、いなくなった小人は戻ってこなかった。

帰り道、動物園から駅までの道は今のよう整備されておらず、新世界から続く細い道にはいくつものブルーシートが張られ、ラジカセから大音響で演歌が流れ、平日も昼間も関係なくおじいさんの酔っ払いやおばあさんの酔っ払いやいろんな酔っ払いが顔を赤くして歌っていた。その道を通る時、両親は私の手をいつもより強く握って少しだけ早足になった。けれど私はそこに小人が紛れているのではないかと、楽しそうな大人たちの顔をきょろきょろ見回したが、結局見つけることはできなかった。

「今日なー、小人が一人おらんようになってんで」

家に帰って、晩酌する父の膝の上に座り教えてあげたが、父もつれない返事だった。

「そうか。また風呂入った時に数かぞえる練習せなあかん」

なんて言うものだから、不本意極まりない。腹立ち紛れに父のビールに口を付けて、鼻の下に白い泡を乗せてみたら、やっぱり私こそが小人なのだという気がした。夕食後、銭湯に行った時も、母は「小人一人」として私の入湯料を払っていた。

よい子の皆さん、動物園へようこそ

それほどまでに思い詰めていたのに、結局私は小人にはならず、すっかり大人になってしまった。両親がしっかり私の手を握ってくれていたお蔭だろう。

思わず両親の思い出が蘇ったことに、ぐっと目頭が熱くなる。

せっかくの休日に毎度毎度動物園を訪れて、しかもずっと時計台の前に居座るなんて、正気の沙汰じゃない。よくもまあ付き合ってくれたものだ。ああ、確かに私は両親から愛されていたのだと、しみじみ思われる。

なのに、私はとんだ不孝娘だ。

二十代の頃、惚れた相手と一緒にいるのだと、両親の反対を振り切って家を飛び出した。果たして、両親の心配通りに、手酷く男に捨てられた。それで、娘を連れて大阪に帰ってきた時には、すでに両親は他界していた。育ててもらった恩を何一つ返すことができなかつたし、孫の顔さえ見せてやることができなかつた。私はあほやから、実家にさえ帰ればいつでもそこに両親が待っていてくれるものだと思っていて疑いもしなかつた。

悲しみに頭がおかしくなりそうだった。けれど、泣いている暇などない。私は一人でこの子を育てなければならぬのだから。両親が私にしてくれたように。

「ママ。小人さん六人しかいてへんの？」

じっと白雪姫たちのダンスを見つめていた娘が、くりくりした瞳を向けて振り返る。

「そっか。じゃあママと一緒に小人さん探しながら帰るか」

そう答えて、娘の手を握り返す。少しでも目を離すとどこかへ行ってしまいそうな、小さく軽やかな手を。

「ママ、ここも誰もおらんない」

サバンナの水辺を模したような大きな水槽を指差す。

「わっ！」

まるでここにいるよと応えるように、水底から浮上した大きな灰色の体が陸に上がる。

「テツオくんや……」

「え？ あのカバさん、ママの友達なん」

——テツオくんはお前と同じ日に天王寺動物園で生まれたんやで。

そう教えてくれたのは、父だったか母だったか。

私と同じ 1983 年生まれのカバのテツオくんならば、いなくなった小人の行方も知っているかもしれない。

「テツオくん！」

よい子の皆さん、動物園へようこそ

大声で呼び掛ける。娘も真似をして「おーい、テツオくん」と手を振る。

すっかり新しいカバ舎に馴染んだテツオくんは、通天閣をバックに背負い、大きな口を開けてあくびを一つした。

〈了〉